自閉スペクトラム症者への司法面接における発話文字数の検討

○上宮愛¹・伊藤大幸²・吉本晏都子³・辻井正次⁴・仲真紀子¹

(¹立命館大学・²中部大学・³大阪市立大学・⁴中京大学)

キーワード：司法面接法、自閉症スペクトラム障害、エピソード記憶

Examining the quantity of utterance in forensic interview for people with autism spectrum disorders.

Ai UEMIYA¹, Hiroyuki ITO², Atsuko YOSHIMOTO³, Masatsugu Tujii⁴ and Makiko NAKA¹

(¹Ritsumeikan University, ²Chubu University, ³Osaka City University, ⁴Chukyo University)

Key Words: Forensic Interview, autism spectrum disorders, episodic memory

目的

近年、事件・事故の被害者、目撃者となった子どもや特別な配慮を必要とする人々への事実確認において“司法面接法 (forensic interview)”と言われる面接手続きが用いられるようになってきた。この面接技法では、記憶研究などで正確な情報を多く引き出すと言われている自由報告 (自由再生) 法による質問を用いる。自由報告は、国内外の様々な実証データにより、信頼性の高い被面接者の自発的な報告を引き出すことが示されている (Orbach, Hersjkowitz, Lamb, Sternberg, Esplin & Horowitz, 2000)。しかしながら、先行研究では、定型発達者や、障害の中でも知的障害のある人々を対象としたものが多く、自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder; 以下 ASD) 者を対象とした実証研究は少ない。第1に、ASDを持つ人々は、自由再生による記憶の想起を苦手とする可能性がある (Bennetto, Pennington & Rogers, 1996)。第2に、意味記憶の記憶成績がよいのに対し、エピソード記憶の想起を苦手とするといわれている (Lind & Bowler, 2009)。これらの点から、自由報告法は、ASD者に適していない可能性がある。本研究では、まず、司法面接法による面接がどの程度 ASD 者から情報を引き出すことができるのかについて検討を行った。

方法

研究参加者：参加者は一般大学生 21 名 (男性 9 名、女性 12 名; $M = 20.24$ 歳, $SD = 1.22$)、ASD 者 16 名 (男性 15 名、女性 1 名; $M = 27.5$ 歳, $SD = 6.27$) の計 37 名であった。

要因計画：(参加者の種類：一般大学生・ASD 者) の 1 要因 2 水準であった。

方法：実験は、個別形式で行った。実験時間は 50 分程度であった。参加者に、雑貨屋に入店してきたカップルが万引きするという内容の 1 分程度の映像を提示した。その後、練習を含めて 15 分程度の妨害課題 (地図の塗り分け課題) を実施した。最後に、視聴した映像について国内で主に活用されている NICHD ガイドライン (Lamb, Orbach, Hershkowitz, Esplin, & Horowitz, 2007) に沿った司法面接を実施した。面接では、映像の内容について主に自由報告法で用いられる 4 つの質問タイプにより報告を求めた。質問タイプは以下のようなものであった。1) 誘いかけ (～について最初から最後まで全部話してください)、2) 手がかり質問 (さっき〇〇って言ってくれましたが、その〇〇についてもっと詳しく話してください)、3) 時間分割質問 (例、店に入ってから店を出るまでの間に起こったことについてもっと詳しく話して下さい)、4) WH 質問 (例、女の人の服は何色でしたか?) などである。面接は、録音・録画し、実験後面接内容を文字に書き起こして分析を行った。

結果と考察

参加者の全発話文字数：面接全体を通して参加者がどのくらい話したかを調べるため、参加者の発話をひらがなで書き起こし、発話文字数を算出した (Figure 1)。発話文字数について対応のない t 検定を行ったところ、有意な差がみられた ($t(35) = 2.33$, $p < .05$, $d = .77$)。一般大学生の平均発話文字数が 3555.33 ($SD = 1918.58$) 文字であったのに対して、ASD 者では 2353.50 ($SD = 863.14$) 文字であった。

Figure 1 面接中の参加者の平均発話文字数

1 ターンめの質問に対する参加者の発話文字数 (映像内容)：映像の内容についての 1 ターンめの質問 (先ほどみた映像の内容について最初から最後まで全部話してください) に対する参加者の発話文字数について示す (Figure 2)。発話文字数について対応のない t 検定を行ったところ、有意な差がみられた ($t(35) = 4.01$, $p < .01$, $d = 1.33$)。1 ターンめの質問に対して、一般大学生では平均 610.14 ($SD = 364.11$) 文字の発話を行ったのに対して、ASD 者では平均 225.44 ($SD = 133.65$) 文字であった。

Figure 2 1ターンめの質問(自由再生)に対する平均発話文字数

これらの結果から、ASD 者は自由再生形式の面接での発話の長さが短い可能性が示唆される。また、一つの質問に対してもその回答が短い。ASD 者により多く、たくさん話してもらうためには、通常的自由報告法に加えて、発話のさらなる促しや、質問の形式を工夫する必要があると考えられる。